様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２７ 年　 ６ 月 １０ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2012～2014
課題番号：２４５２０４４９

研究課題名（和文）日韓対照を通した映像メディアの言語的特徴の記述

研究課題名（英文）Pragmatic features of video media language in contrastive viewpoint between Japanese and Korean

研究代表者
鄭　惠先（JUNG, Hyeseon）

北海道大学・留学生センター・准教授

研究者番号：４０３６９８５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，日韓対照の視点を取り入れて，メディア言語研究という立場から両言語による映像メディアの考察を行った．実例をもとに，「ジャンルによる語用論的な特徴」と「映像メディアの翻訳による変形」について考察した結果，とりわけ日本の映像メディアでは番組独自のジャンル特性が言語表現に強く影響していることが示された．また，翻訳字幕において，ジャンルによっては翻訳者のストラテジーより番組制作側の企画意図が優先され，主観的な解釈が付加される「意図的な改変」が積極的に行われることが示された．今後も，映像メディアのジャンルと翻訳，両言語の固有性という３つの要素を有機的に関連づけて考察を続けていきたい．

研究成果の概要（英文）：This paper compares and contrasts the Japanese and Korean languages in video media and indicates the following two points: (1) the genre of each program strongly affects pragmatic features of linguistic expression in each language, and (2) TV program makers sometimes make intentional and excessive pragmatic modification in the translation process. It is because the intention of the project by program makers had priority over the strategy by translators, and it can be called “intentional modification,” which differs from “obligatory modification” indispensable for translation. Taking into account the conclusion of this paper, the author will continue to conduct the research on video media language, focusing the relation among three elements: genre of media, linguistic differences of the two languages, and translation.

研究分野：社会言語学・日韓対照言語学

キーワード：ジャンル　翻訳字幕　義務的・意図的改変　役割語　キャラクタの再創出

１．研究開始当初の背景

金水（2000）で「役割語」という用語が提唱されて以来、現在はさまざまな言語研究分野で「役割語」が注目されている。これは、本研究者も連携研究者を務めた科研研究の「役割語の理論的基盤に関する総合的研究」の研究成果となる、『役割語研究の地平』と『役割語研究の展望』という２冊の学術書に刺激されたところが大きい。このほかに、本研究者は「日韓対照役割語研究―相互翻訳と言語教育の視点から―」に対する科学研究補助金をもとに、日本語と韓国語の役割語の対照研究を続けてきた。本研究は、これまでの「日韓対照役割語研究」を応用・発展したものといえる。

「役割語」とは、特定の人物像（年齢、性別、職業、階層、時代、容姿・風貌、性格等）に刷り込まれている特定の言葉づかい（語彙・語法・言い回し・イントネーション等）を指す。「役割語」はその性質上、小説や漫画、映画などの大衆文化作品を対象として議論されやすいが、定延・澤田（2007）で提唱された「発話キャラクタ」という概念をはじめ、現在はより現実の発話に密接した言語表現に目を向けた研究も増えつつある。

こういった役割語研究の広がりを受けて、本研究では、元々フィクションのみを考察対象としてきたこれまでの「日韓対照役割語研究」の枠を広げ、ニュース、対談、クイズやバラエティ番組に至るまで、多様なジャンルの映像メディアを研究対象とし、取りあげる言語項目においても、従来の「役割語的要素」のみに限定せず、「コミュニケーション効果」という広角的な観点を取り入れることで、さらに多様な言語表現を考察対象とした。

２．研究の目的

本研究では、日韓対照言語学的な視点から、日本と韓国の映像メディアを考察・分析し、その言語表現の特徴を体系的に記述することを目的としている。よって、これまで以下の２点に注目して研究を進めてきた。

(1) 映画やドラマ、ニュース、バラエティ番組、対談などの映像メディアのジャンルによる言語的特徴
(2) 日本語と韓国語の言語構造や表現の違いによる、言語切り換えの際に起きる形式的なズレ、心理的なギャップ

本研究を通して、これまでの「メディア言語研究」の領域をさらに拡張・発展していくのに一助できたと考える。

３．研究の方法

初年度は、これまでの「日韓対照役割語研究」の枠内で行ってきた対訳資料分析のノーハウを生かし、「メディアリソースの収集」を中心に研究を進めた。蓄積されたデータの分析結果にもとづいて仮説を検証した上で、新たなリサーチクエスチョンを抽出し、さらにメディアリソースを充実させていくという研究サイクルを続けた。本研究のアプローチ・ポイントである「ジャンル」と「言語切り換え」に関するいくつかの仮説にもとづき、主に「報道・情報」分野のニュース、スポーツ、対談番組と、「娯楽・フィクション」分野のドラマ、アニメ、バラエティ番組などの映像メディアを収集した。

その結果、「翻訳課程での意図的な改変プロセス」と「言語切換によるキャラクタの再構築」という２つの傾向が明らかになったため、２年目の 25 年度においても引き続き、両言語による対訳データを精査し、翻訳を介した字幕・テロップ、吹き替えに見られる言語的なズレを明らかにしていくことに集中した。

研究最終年度の 26 年度は、考察対象をバラエティ番組にしぼって、中でも韓国のバラエティ番組の文字テロップに制作者の関与が大きいことに注目して分析を続けてきた。具体的には、日本と韓国のバラエティ番組を

分析対象とし、映像の編集過程で付加される文字テロップが、キャラクタの構築と強化を助長する道具として機能していることを、実例をもとに検証した。

４．研究成果

「日韓対照を通したメディア言語研究」を大枠とする本研究は、大きく２つのアプローチから進められた。一つ目は、さまざまな映像メディアのジャンルによる言語的な特徴に注目したアプローチであり、二つ目は、日韓または韓日翻訳を介した映像メディアにおける、言語切り換えによる形式的、心理的なズレに注目したアプローチである。

まず、本研究では、実際の映像メディアデータを通して、ジャンルごとの言語的な特徴を明らかにし、その背景にある制作者側の意図と、視聴者側の解釈を調査することで、「コミュニケーション効果」という観点から「映像メディア言語」の具体像を示した。たとえば、バラエティ番組の文字テロップの役割と受け手に与える影響について、実際の映像メディアのコンテキストを通して整理した。また、これまでの役割語研究の実績を生かして、娯楽番組などでキャラクタを生み出す言語・非言語表現を取りあげ、キャラクタ構築と強化の過程を明らかにした。

また、映像メディア上での言語切り換えについても、「役割語研究」の観点から考察を行った。メイナード（2009）や太田（2011）でも述べられているように、翻訳を経た字幕・テロップと吹き替えには、意訳の程度や情報の選別によって必然的に言語間ギャップが生まれてくる。とくに、インタラクションを基盤とする言語表現の翻訳はキャラクタの変質と深い関連を持つ。そこには、表意と推意、直接翻訳と間接翻訳、処理労力と意味伝達効果といったさまざまな関連要素がある。

本研究では、両言語による対訳データを精査し、翻訳を介した字幕・テロップ、吹き替えにおいて見られる言語的なズレを明らかにし、起点言語が伝達者（翻訳者と映像メディア制作者）の意図によって操作されることを実証した。その結果、目標言語の中で、語彙レベルの対応関係の等価と、受容者の反応にもとづく動的等価の間に調整が行われる様子を具現化して示すことができた。

ここでは、これまで行ってきた研究発表のうち２つの概要を紹介し、具体的な成果として報告する。

(1)第 36 回メディアとことば研究会「日韓対照によるメディア言語研究へのアプローチ-映像メディアのジャンルによる言語的特徴を中心に」：本発表では、映像メディアのジャンルによる言語的特徴に注目して、「スポーツニュースでの記者の発話」と「実況中継でのアナウンス」という２つの日韓のメディアリソースを比較した。まず、前者の分析では、名詞句表現の「感応的同調」という付託的機能に着目し、日本では名詞句表現、韓国では丁寧体の動詞文が多用されることを示した。つぎに、後者の分析では、ダ体の「眼前描写」という機能に着目し、日本では普通体が混用され、韓国では常時丁寧体が用いられることを示した。以上から、「スポーツニュース」と「実況中継」という２つの映像メディアでは、感応的同調を強調する日本メディア、コンテキストスタイルのフォーマル度を維持し客観性を強調する韓国メディアという、ジャンルによる言語的特徴が明らかになった。

(2)第 30 回社会言語科学会研究大会「翻訳における意図的な変形プロセスとキャラクタの再創出–映像メディアの日韓・韓日翻訳を例として–」：本発表では、映像メディアにおいて日韓または韓日翻訳を介した字幕と吹き替えを考察対象とし、両

言語の映像メディア間での翻訳の際に起こり得る形式的なズレと、それに伴う心理的なギャップについて考察した。とりわけ、「インタビューでの発話」と「映画・ドラマの台詞」という２つのジャンルでの翻訳に注目し、映像メディア上の日韓対訳の実態を観察した。その結果、韓国の映画やドラマの日本語字幕に、「同一相手への常体と敬体の混合」が頻繁に表れることがわかった。この傾向は、吹き替え版でも同様である。また、情報番組でのインタビュー場面においても、番組のバラエティ性が高いほど、韓国人発話の日本語字幕には、同じようなスタイル・シフトが表れやすい。一方、日本語によるインタビューの韓国語字幕では、スピーチレベルが固定されるだけでなく、常体から敬体へのスピーチレベルシフトが見られることがある。

もともと、日本語のスピーチレベルは、上下関係だけでなく、親疎関係によっても使い分けられる。普段「敬体」で接する相手との談話中に「常体」を織り混ぜることにより、相手との心的距離を縮める効果が期待される。こういった日本語の言語的特徴が映像メディアの翻訳にも適用され、それが制作側の表現意図と融合することでさらに拡張するのである。ひいては、キャラクタ性を際立たせた話し言葉に加工するなど、わざとステレオタイプを植え付けることで効果の増幅を狙うような意図的な変形のプロセスも見られるようになる。本来、「翻訳」においてもっとも重視されるのは、目標テキストの受容者（＝視聴者）の反応が起点テキストの受容者の反応と等しくなるという「動的等価」であるが、映像メディアでの翻訳においては、元のメッセージを翻訳後の映像メディアの中でどのように表現したいかという、伝達者（＝制作者）の意図と目的によって、さまざまな言語的な操作が行われる。その結果、翻訳前の映像メディアには現れていない新しいキャラクタが、翻訳後のメディア上で再創出されるという現象もが観察されるのである。

以上が、２つの研究発表の概要である。本研究の特色は「日韓対照言語研究」と「メディア言語研究」の融合である。もちろん今まで映像メディアを「対象」とした言語研究がなかったわけではないが、対照言語研究、中でも「日韓対照」という明確な視点を「メディア言語研究」へ直接的に取り入れるといった試みは見られなかった。両言語での映像メディアを対照・比較することで、メディア言語の特徴とメディア翻訳上の変質が浮き彫りになり、今後の「日韓対照言語研究」と「メデイア言語研究」の発展に大いに貢献できると考える。

さらに、本研究では、取りあげる対象をメディアの中でも＜映像＞メディアに限定している。新聞などの紙媒体のメディアと違って、映像メディアでの言語表現は、映像・音声情報とどう絡み合い、どのような効果が期待されるかが、重要な考察ポイントとなる。とりわけ、近年の映像メディアは、さまざまな視覚効果を駆使した字幕・テロップや吹き替えなどを通して大量の情報を送出する。その言語表現は、視覚と聴覚の両面でバラエティに富んでおり、そこに制作者と伝達者（翻訳者）の意図、視聴者の解釈などが互いに反応しあった結果が、「コミュニケーション効果」「キャラクタの再創出」などにつながっていくのである。

今後も、本研究を通して、このように複合的に絡み合っている諸要素間の関係と実態が明らかになっていくと考える。

＜引用文献＞

①金水敏（2000）「役割語探求の提案」佐藤喜代治(編)『国語史の新視点 国語論究』第 8 集、pp.311-351、明治書院
②定延利之・澤田浩子（2007）「発話キャラクタに応じたことばづかいの研究とその必要性」『2007 年度日本語教育学会秋季大会予稿集』pp.83-88、日本語教育学会
③メイナード、泉子・K（2009）『ていうか、やっぱり日本語だよね。–会話に潜む日本人の気持ち』、大修館書店
④太田眞希恵（2011）「ウサイン・ボルトの“I”は、なぜ「オレ」と訳されるのか―スポーツ放送の役割語―」金水敏編『役割語研究の展開』、くろしお出版

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）
①青木麻衣子・小河原義朗・鄭惠先ほか 4 名（2014）「【特集】留学生と日本人学生がともに日本語で学ぶ「多文化交流科目」の創設（執筆担当：授業実践 Ⅰ．日本語のバリエーション）」北海道大学留学生センター紀要第 18 号 北海道大学国際本部留学生センター 査読無 pp.1-97（pp.18-29）
②鄭惠先・恩塚千代（2013）「SNS を利用した相互学習の効果と課題-日韓両言語学習者の協働的活動を例として-」『日本語教育研究』第 27 巻 査読有 pp.177-194
③鄭惠先・恩塚千代（2012）「日韓両言語学習者間の役割語相互学習–オンライン協働翻訳活動の分析と評価–」『日語日文學研究』第 82 輯１巻 査読有 pp.517-538

〔学会発表〕（計７件）
①鄭惠先(2015)「『多文化交流科目』授業実践報告 世界の諸言語との対照から日本語を見直す」 2014 年度北海道大学国際本部留学生センター研修事業 多文化交流科目シンポジウム 留学生と日本人学生がともに学ぶ「多文化交流科目」を考える 北海道大学（札幌）2015 年２月 21-22 日
②鄭惠先(2015)「バラエティ番組に見られる文字テロップのキャラクタ構築の機能」役割語・キャラクター言語研究 国際ワークショップ 科研研究費「役割語の総合的研究」研究代表者：金水敏 課題番号：23320087 大阪大学（大阪）2015 年２月 16-17 日
③鄭惠先(2014)「慣用表現の多言語対照による語彙の意味拡張の分析」 第２回対照言語学ワークショップ（北海道大学大学院文学研究科・言語情報学講座主催） 北海道大学（札幌）2014 年８月６日
④鄭惠先(2013)「協働を重視したグループ活動の試み-オンラインとオフラインをつなぐ」 国際シンポジウム留学生と日本人学生が共に学ぶ「多文化交流」型授業 の開発 北海道大学（札幌）2013 年 12 月７日
⑤鄭惠先(2012)「語用論的立場から見る映像メディアの韓日翻訳」 銘傳大學 2013 国際學術研討會「應用日語教育的理論與實践」 銘傳大學（台北）2013 年３月 15 日
⑥鄭惠先(2012)「翻訳における意図的な変形プロセスとキャラクタの再創出–映像メディアの日韓・韓日翻訳を例として–」 第 30 回社会言語科学会研究大会 東北大学（仙台）2012 年９月１・２日
⑦鄭惠先(2012)「日韓対照によるメディア言語研究へのアプローチ-映像メディアのジャンルによる言語的特徴を中心に」 第 36 回メディアとことば研究会 東洋大学（東京）2012 年３月９日

６．研究組織
(1)研究代表者

鄭　惠先（JUNG, Hyeseon）
北海道大学・国際本部留学生センター・准教授
研究者番号：４０３６９８５６

(4)研究協力者

恩塚　千代（ONZUKA, Chiyo）
大阪市立宮原中学校・校長
研究者番号：なし